

2008. 1. 30

航空幕僚長田母神空将熊谷基地初度視察
講話『我が愛すべき祖国日本』

私は福島県郡山市出身です。防大を卒業して戦闘機のパイロットになりたかったのですが、航空適性検査を受けたけれど当時適正がなかった。当時アメリカに行けるのがナイキ幹部、今で言う高射幹部です。迷いましたが官費でアメリカに行けるという崇高な理由で高射幹部を希望したということでもあります。幹部候補生学校を卒業したが、出身が福島なのでスキーが滑れないため北海道を希望しました。しかし九州に6年半勤務しました。そして北海道を希望。しかし、沖縄だった。今はそんなところはないが、昔は本当に意地悪だった。高射部隊で10年ほど生活して幹部学校の指揮幕僚過程で戻って、東京周辺に11年半ぐらいいました。空幕等、そして三沢第3航空団基地業務指令をやる。この時初めてスキーを覚えた。二冬いました。二冬で62日スキーをやった。全く駄目だったのが滑れるようになった。その後は空幕厚生課長で戻り、沖縄南混団司令部幕僚長、小松の第6航空団指令、空幕装備部長、統幕学校長、航空総隊司令官、航空幕僚長というのが私の経歴であります。

私の人生で大きなことがいくつかあった。卒業し、自衛隊に入って27歳と6ヵ月になって結婚しましたが、これも一つの大きな転機でした。最初は、それまで寒い下宿に帰っても風呂もない、食事もないという状況だったのが、食事ができて、風呂には入れるということで、家に帰ると家内がいるというのは、夢みたいな感じでした。今は全然違う。「貴方ゴミ捨てにしますか、ベランダの片付けにしますか。」と言われる。変わるものですね、女性も。

もう一つは、私は、実は3年半前に頭の手術（頭をあける）をしました。これは国家機密です。中央病院で人間ドックに入った。そしてたまたま今、那覇病院長をやっている彼が私の担当ドクターで、私が統幕学校長の時「学校長、MRIが空いているので脳のMRIをとりましょうか」と言ったのです。どうしようかなと思ったけれど、撮ってもらったら丁度頭の右の後ろに腫瘍があるといわれた。良性なのか悪性なのか分からない。聞いてみたら、開けてみないと分からないといわれたので、開けた。中央病院にたった2週間の入院なのですが、7時間半の手術です。大変勇気のある決断だと皆に言われた。頭を開けて、脂肪の塊が幸い悪性ではなくて良性だった。手術で顔がゆがんでしまった。3年半たってほとんどなくなり、今はトムクルーズを越えたというところですよ。顔がゆがんでいて大変辛い時期を過ごした。顔なんて曲がっていてもいい。顔だけでなく、どうせあなたは心も曲がっていますと言われてたりしながら

皆に励まされました。今は皆から見ても気がつかない程度にはなった。ただ若干の不自由はありますが。

今日は、今から私が常日頃感じていることを皆さんにお話をしたいと思います。

今、日本がなかなか普通の国になれないという問題がある。普通の国になれないというのは、例えば国を守ると言ったときに今、東シナ海では日本と中国の中間線があります。中間線で一応日本と中国が中間線よりも相手方の海域で海洋調査をやる時には、事前に通知をするということになっている。これは条約上事前に通知すればできることになっています。中国は事前に通知をして日本側の海域でどんどん海洋調査をやります。そしてどんどん沖縄本島に寄ってきます。でも日本はむこうにいつてなかなか海洋調査を実施できない。国の決断がそこはできない。いつてやったら問題になるのではないかと。しかしこれを長い間今のままの状態で放置しておいて本当に大丈夫かというようなことがあります。でもこれはいったいどこの省庁が担当するのかというのが、今のところあまりあきらかではない。本当は中国がこっちでやる時は、同じくらい日本がやり返さないと、実績として中間線を維持するのがどんどんと難しくなる。

それから日本は、情報公開法というのがあります。官公庁は、情報公開をしなければならない。でも、普通の国にある機密保護法というのが日本にはないのです。ところが情報公開法と機密保護法というの、先進国ではペアになっている。この状態は日本の安全保障上困るのではないか。

あと、専守防衛という話しもある。専ら守るだけ、と。これは日本の国策ですからそういうことになっていますけれども、本当にその国策が今もこれからもずっと正しいのかということが、検討されることがなければいけない。常時、見直しがなされないと。そういうのを誰が一体これを担当して誰が問題を提起してやるのかというのがあまりあきらかになっていない。そうすると国を守るといった時に、やはり防衛庁が防衛省になってこれから日本の安全保障に関わることは全部防衛省が考えてくれるのではないか、と思うのです。それでそうならないかなければならないのではないか、と。

で実は、去年の1月に防衛庁から防衛省になりまして、防衛省が日本の安全保障政策全般を担う官庁に生まれ変わる予定だったのですけれども、色んな事がありすぎてなかなか事後対応で去年はそこまでいけなかったというような状況です。幸い航空自衛隊は、あまり世間を騒がすようなことはなかった。航空幕僚長が記者会見で謝罪をしたことは1回もありません。海上幕僚長は6回も謝罪したそうですけれども。

内局はもちろん皆さんご承知の守屋事務次官の件がありまして、随分と本当にやったものです。私もゴルフが好きなのですけれども、私は利害関係者とゴルフをやって

はいけないと分かっているのでやりません。あの人は一つの会社の人と8年間で300回以上もやったと言うのだから、年間40回ですね。それでもスコアが100をきれないそうです。

そういうことがあってなかなか防衛省がなりきれなかったんですけども、実は日本が本当に昔から歴史と伝統がある素晴らしい国であるにもかかわらず、今なんかこのいわゆる大和魂というか、そういうものが日本から失われつつある、というふうに今ちょっと感じています。実は昨日、今度3月1日に開封になる『明日への遺言』という映画があるが、この試写会に昨日招待されて、少し見に行ってきたのですけれどもこれは岡田資（おかだたすく）陸軍中将、昭和20年の2月。日本は20年の8月に戦争でアメリカと終戦を迎えるわけですがけれども、20年の2月に名古屋の周辺を守るのに東海方面軍司令官という地位にあったのがこの岡田資陸軍中将なのだそうです。名古屋はアメリカの絨毯爆撃で焼夷弾をどんどん落とされて、ものすごい数の民間人が焼け死んだのです。戦争は民間人を直接狙って攻撃をしてはいけないという国際条約がある。戦時国際法で、「民間人を直接狙ってはいけない」と。だから軍人は軍人と分かるように武器を持ち、制服を着、そういうふうちゃんと民間人と識別できるようにしておかなければいけないということなのです。けれども明らかに民間人が死ぬと分かる所を攻撃するのはいけないわけです。国際法違反なのです。これらの人が、日本の旧軍の高射砲などで飛行機が落とされたりしてパラシュートで脱出をしてアメリカのパイロットや機上の無線員とかがパラシュートで降りてくる。これら20数名が日本軍に逮捕された。通常、国際法に基づいて戦闘行為に参加していれば相手に捕まれば捕虜としての待遇が受けられるのです。それで捕虜を虐待してはいけない、というのもまた国際法なのです。無差別爆撃をするという国際法を守っていないから捕虜になれない、いわゆる戦争犯罪人であるということで岡田中将は、この28名の米軍人を略式の裁判で処刑したのです。それが結局犯罪ではないかということをお問われているという映画なのです。この岡田中将以下、彼の部下もいっぱい裁判にかけられるわけですが、岡田中将は、最後まで部下を守る発言をして彼がただ一人死刑、絞首刑になって部下が皆救われるという話なのです。これを見てみると日本の昔の軍人というのは本当に立派だった。見てて本当感動します。だから指揮官というのはそうでなければいけないし、そういう精神を持った人が旧軍ではほとんどだったと私は思います。しかしアメリカは無差別爆撃をやったにもかかわらずほとんど多くの方は戦勝国だからという理由で裁判を受けていないわけです。

東京裁判というのが戦後行われたのですが、これは、若い人は知らないかもしれませんが、日本が昭和20年、1945年に戦争に負けてそして翌年から市ヶ谷で東京裁判というのが行われたのです。市ヶ谷の講堂です。ここではA級戦犯といわれる東条

総理大臣以下 28 名の方々が連合国の裁判にかけられることになったのです。この裁判それ自体が、勝ったほうが負けた方を裁判するというのにはあり得ないわけです。今、イラクでフセイン大統領が死刑になりました。でもあれは裁判をしたのはイラク人です。イラク人がイラク人を裁くのは解るけれども勝った方が負けた方を裁くというのは国際法上ないわけです。この東京裁判でアメリカが狙ったのは、日本が二度と再び強大な国となってアメリカに立ち向かってくることがないように、ということ徹底的に狙ったわけです。最終的に東条総理大臣以下 7 名の方が死刑になったのですけれども、実は東京裁判というのは A 級戦犯 28 名が起訴されたのは、昭和 21 年の 4 月 29 日です。昭和天皇の誕生日に起訴されました。そして裁判をやって、死刑執行は昭和 28 年の 12 月 23 日。今の天皇陛下、当時皇太子殿下の誕生日に死刑執行になったのです。これは決して歴史の偶然ではないのです。日本は天皇誕生日を祝う。皇太子殿下の誕生日を祝う。それを祝えないようにするあるいは天皇の権威を貶めてやるという意図がそこにたぶん働いていたと思います。本当は戦争というのは勝った方も負けた方も国際法に基づいて捕虜を虐待したとか民間人を殺したとかそういうことについては勝った方も負けた方も裁かれるのです。でも東京裁判というのは、負けた日本だけが裁かれたのです。

今、日本の安全保障の中心は日本安全保障条約ということで日本はアメリカと仲良くしていかなければいけないですけれども、戦後日本はアメリカにまもってもらったことのできたからなかなか日本の国の中に自分の国を自分で守るという意識が育ってこないのです。そうすると日本はずっとアメリカに頼らざるを得ない。アメリカに頼るということはアメリカにとってもやっぱり利益があるわけです。日本人としては損が出るということなのです。だから国というのはやはり一歩ずつ独立の方向にいかなければいけないですけれども、なかなかいけない。それでアメリカがまず何をやったかとういうと、戦争間際に今、名古屋の爆撃の話をしました。東京も間もなく来る 3 月 10 日に東京大空襲というのがあったのです、昭和 20 年の 3 月 10 日東京大空襲。一晩で 10 万人以上の方が焼夷弾で焼け死んだのです。この攻撃は明らかに国際法違反なのです。これを指揮したのはカーチス・E・ルメイという当時将校です。この人は戦後アメリカの空軍参謀長になった人です。日本は航空自衛隊の創設に貢献した功績ということでこの人に勲一等旭日大綬章を与えています。そういったことを知るとなかなか割り切れない思いになります。東京大空襲は昭和 20 年 3 月 10 日に東京湾から北へ向かって南風が吹いていたらしいのです。カーチス・E・ルメイ将校はまず、東京の一番南側からずっと家を焼夷弾で火を点ける。そうするとどんどん北に燃えます。そうすると今度は埼玉県側をずっと家を燃やすと北へ逃げられない。それで東、西を抑えるとなると東京等真ん中は誰も逃げ場がない。そこで上からどんどんと焼夷弾を落

とされて、一晩で10万人以上も民間人が亡くなったのです。これは明らかな国際法違反です。これは当時3月10日というのは、日本陸軍の陸軍記念日だったのです。日清戦争で日本軍がロシアを奉天海戦で破ったという陸軍記念日にあたるわけです。8月15日が過ぎて、アメリカは日本に対して進駐をしてきて検閲の体勢を強いたのです。民間検閲局という約6,500名の組織を作って、頭1,500人はアメリカ人だったらしいが、下の5,000人はアルバイトの日本人だった。ということで新聞も雑誌もラジオの放送も全部いわゆるアメリカの連合軍司令部の検閲を受けてから出されていた。雑誌を出す時も、まず2冊持ってきなさい、と。で、1冊直します。マジックで直して、直したのがわからないように持っていく。それから雑誌や新聞が出されていた。これは検閲の指針が示されていてアメリカの悪口を言うことは駄目、日本を褒めることは駄目、というような指針があって、それですべて新聞も雑誌も出されていたし、ラジオの放送もそうだった。ラジオでも真相はこうだという番組が昭和20年の12月8日に始まった。真珠湾攻撃の日に。そこでも日本軍は東南アジアや中国で、ものすごい残虐なことをしたそうだと、それをやったのは誰だ、と。指揮官は誰だ、あいつだともんでもない奴だというような放送がずっと垂れ流しにされた。日本の一般国民はそれが戦争が終わってわかった真実だと多くの人が思ってしまう。それから、『太平洋戦争史』という歴史書が配られた。これが10万部、12月から日本に配られました。これも独裁国家日本が戦争に負けて今からアメリカによって民主主義国家に変えられて、今から日本は良くなるというようなアメリカから見た一方的な歴史書です。これで歴史教育をやりなさいと。この時に大東亜戦争という言葉を使ってはいけないということも同時に指示された。日本は大東亜戦争というのは閣議決定なのです。「この戦争を大東亜戦争と呼ぶ」と。だけどこの時大東亜戦争という言葉をやめて太平洋戦争といいなさい、と言われて今は太平洋戦争といわれると皆さん一般的に聞いているけど、大東亜戦争という言葉はわからないという人が結構多いですね。

それから公職追放というのがあったのです。これがまたすごく大きい。いわゆる日本は悪くなかった、と正しい国だった、と対等にアメリカと議論するような人達は皆公職から追放された。これが20万人以上も追放されたのです。軍人だったり、国の役人、政治家、大学の先生とかが20万人以上も追放されたのです。20万人以上も追放されるから穴埋めが必要になります。そうすると穴埋めのために戻ってきたのは、戦前追放されている人達が多かったわけです。いわゆる左翼と呼ばれる人たちです。脳みそが頭の左半分にしかないような人たちが皆それぞれ公職に戻ったわけです。大学の先生に左翼がいっぱい増えたのです。これは上智大学の渡部昇一（わたなべしょういち）教授ですとか色んな人に代わっていますけれども、その時東大なんかは、東大総長矢内原忠雄（やないはらただお）という人が戻った。この人は戦前、天皇家を潰す

べきだと言って追放されていたいわゆる左翼です。これが東大総長に戻りました。左翼の弟子をいっぱい連れて。京都大学総長は滝川幸辰（たきがわゆきとき）という人です。この人も天皇制廃止論者で戦前追放されていた人です。それでやはり左翼の弟子をいっぱい連れて京都大学へ戻った。一橋大学総長は都留重人（つるしげと）という人です。彼はハーバード大学に留学していましたが、ハーバードノーマンというアメリカの外交官がいた。これは実はコミンテルンのスパイだったことが解って自殺をした人ですが、これとグルだった人です。東大経済学部の教授だった大内兵衛（おおうちひょうえ）という人は、やがて法政大学の総長になる人ですがけれども、左翼の弟子をいっぱい連れて法政大学へ行く、と。これらの人たちが、戦後どんどん大学ができるけれどもみんな左翼の人を大学の先生に推薦していきます。今日本の大学がやや左翼に乗っ取られたような状況から抜き出られないのは、そのためです。その影響が残っているのです。私は今、東大教養学部のすぐそばに住んでいるのですが、毎朝東大教養学部の中を駆け足するのです。私、今年 60 歳になるのですが毎朝 6 キロぐらい走るのです。そうするとどこの国の看板か、頭が狂っているんじゃないかというような看板がいっぱい立っている。それは日本の一番金をかけている大学です。国家のリーダーを育てるということでつくられた大学が、何か左翼に乗っ取られたような状況になっている。学校に行くほど今は悪い子になっている。この状態から抜け出そうと頑張ったのは、安倍総理が途中でやめられちゃいましたけれども、教育基本法を変えたり、教育関連 3 法を変えたりして、なんとか直そうと思って頑張っていたところなんです。今後少しずつ改善される方向にはいくと思います。

この公職追放の影響が今でも出て、当時大学で左翼教育を受けていた人たちが今、日本の社会のリーダーです。これは政界、官公庁、大企業にもいっぱいいるわけです。これは勉強ができるとかできないとかは全く関係ないですから。思想はね。この影響はすごく大きい。これも結局なぜそうなったかという、GHQでこの政策を勧めたのはホイットニー民政局長という陸軍准将です。その下にいたのがケーディス中佐というのがいたのです。彼らはちょうど 20 世紀全般アメリカにコミンテルンが非常に入り込んで、左の洗脳政策にならされたいいわゆる左翼だったのです。彼らの考えに賛同しない人はみんな外していった。そういうことで今、そういう状態からなかなか抜け出られなくて左翼というのは国を敵だと考えるのです。国家というのは、みんなで作って自分達の生活を守るためにつくっているわけです。だけど、国家は国民をいじめるものだと、だからできるだけ力が弱い方がいいと。国家を代表するものは何だといえれば例えば自衛隊、例えば警察、例えば裁判所、例えば大企業とこういったものはどんどん力が弱くなった方がいいと考えるわけです。これから今なかなか抜けられないのです。だから自衛隊を例えば強くするなんていうのは当然大反対です。防衛予算よ

りも社会福祉に回せということになります。そして国が国民をいじめるから国が犯罪を犯したことに對する對処なんかも結局被害者の人権ではなく加害者の人権ばかりを言うような人が多いです。それは被害者よりは加害者のほうが悪いに決まっている。だけど加害者にはめっぽう甘くて、被害所の人権というのはあまり考慮されないというような特徴があります。そういうこととか日本が戦後ずっときたのは東京裁判でやられ、アメリカの占領政策でやられたのがなかなか抜け出られていないという状況があるのです。

いわゆる中国での南京大虐殺もそうです。南京大虐殺というのは、見た人が一人もいないのです。そういう話を聞いたことがあるという伝聞の証言だけです。普通の裁判では、伝聞の証言だけで人を裁くことはできないのです。これは東京裁判でも証明することができなかったのです。南京大虐殺というのは1937（昭和13）年の12月13日、松井石根（まついいわね）大将という陸軍大将が当時中国国民党の首都であった南京に入ってしまったのです。南京は蒋介石隷下の唐生智（とうせいち）とう將軍が守っていたのです。松井大将は、南京をオープンシティにきなさい、要するに戦わないと宣言きなさい、どうせ日本軍が勝つから、そうすれば人が死ななくてすむから、と言ったけれども唐生智中国將軍がこれを拒否したのです。後ろでコミンテルン、それに共産党とつながっていたのですけれども。それで松井大将は南京に入ってしまった。松井大将は隷下にちゃんと通達を出してから入っている。悪さをする兵隊がいたら嚴重に取り締まれ、と。そこに孫文の墓があったのですけれども孫文の墓は中山陵（ちゅうざんりょう）といったらしいのですが、この孫文の墓というのは高台にあって要衝らしいのです。戰略の要衝けれどもそこに立ち入ってはいけない、というような通達を出して入ってしまった。そういう人が虐殺の命令を命ずるわけがないのです。

実はよく1938年の2月の2日に国際連盟で顧維鈞（こいきん）という中国の代表が、日本軍は南京で2万人の民間人の大虐殺をした、そして婦女暴行をやったと。これに對して国際連盟は批難声明を出すべきだと。12月に入っていて2月の2日にです。1ヵ月半も。でもこれを国際連盟は受け入れなかった。当時2万人といったのが受け入れられなかった。当時日本は、国際連盟から脱退（1993年から脱退）していますから、もう4年以上たっているわけです。だから国際連盟は反日の氣運でいっぱいなわけです。そこでも認められなかった。それは嘘っぱちなのです。嘘だと言って戦後は大臣がいっばいやめたので、政治家とか大臣はやめたのでなかなか日本は言論の自由がなかった。親日的な言論の自由がないのです。反日的な言論の自由はあるけど。日本が、アメリカやイギリスやフランスやドイツがいる白人諸国に比べて、中国やアジアや朝鮮半島でやったことというのはきわめて穩健な政治です。

日本は、中国人も朝鮮人も日本の陸軍士官学校に昔入れたのです。留学させたので

す。中国では、蒋介石も陸軍士官学校に入っている。それで新潟の高田の連隊で3年間の隊教育を受けている。マニラの軍事裁判で処刑になった、洪思翊（ほんさいく）陸軍中将という韓国名の人があります。この人は陸軍士官学校の26期で、硫黄島で名前が有名になった栗林忠道陸軍中将。去年『硫黄島からの手紙』で映画を見た人もいっぱいいると思いますが。この栗林忠道中将と同期生なのです。彼は朝鮮人の名前のまま、日本帝国陸軍の陸軍中将になった人です。その1期後輩で27期には、キンソコン大佐という朝鮮人の人があります。この人は、日中戦争のとき支那で日本の兵隊1,000名を率いている大隊長だった。その軍功著しいということで、昭和天皇の金紫勲章をもらっている人です。もちろん朝鮮名の名前のままです。創氏改名とかはやっていません。天皇陛下の金紫勲章というのはめったにもらえるものではない。でも朝鮮人である彼はもらっているわけです。日本はまた韓国、いわゆる朝鮮の最後の李王朝というのがある。李王朝の最後の天皇は李垠（りうん）殿下という人です。この人は1910年に日韓併合という状態が起きます。韓国が日本になるわけです。日本に占領されるというか。李垠殿下は10歳で日本に来る。人質のような形で朝鮮王朝から日本に来る。日本はこの人を皇族として立派に丁重に扱ったのです。学習院を卒業されてこの李垠殿下は陸軍士官学校の29期生で入ったのです。さっきの栗林忠道中将の3期後輩です。終戦時は宇都宮で陸軍中将で活躍をされた。この人の所に嫁いだのが梨本宮方子（なしのもとのみやまさこ）妃殿下という日本の昔の皇族です。梨本宮家というのは、この方は昭和天皇のお妃候補の有力な一人であった方らしいです。それは当時政略結婚という形かもしれませんが、日本政府は朝鮮の王様天皇に嫁がせたのです。ラストエンペラーという映画が10年ぐらい前にありましたけれども、あれで有名になった溥儀殿下という人があります。満州王朝の最初の殿下、それから清朝最後の殿下です。この溥儀殿下の弟が溥傑（ふけつ）殿下という方です。この溥傑殿下のもとに嫁いだのがやっぱり日本の華族の嵯峨浩（さが・ひろ）妃殿下という人です。これを当時のアメリカ、イギリス、フランス、ドイツとかロシア等がやったことと考えると、例えばイギリスがインドを占領してもイギリスの王室からインドの王朝へ嫁にやることは絶対にありません。ましてやインド人を士官学校へ入れるなんてこともありません。日本以外のどこの国がやったかということです。日本は大学、学校はもちろん朝鮮半島の中でもいっぱい造ったのです。学校だけじゃなくて発電所も工場もいっぱい作っただけでなく、ものすごい投資をしたのです。白人国家がやったことというのは、いわゆる搾取です。行って何かそこから持ち出してくる、と。日本は本土が手薄になっても朝鮮半島や満州に投資をしたのです。大学も日本は戦後帝国大学というのを9つ造った。東京大学、京都大学、東北大学、北海道大学、九州大学、6番目に作られたのがソウルに造る京城帝国大学です。今のソウル大学の前身です。日本政府が作ったこの京城帝国

大学の建物の一部が今でもソウル大学として残っているそうです。これが造られたのは1924年です。その後4年後の1928年に台湾に台北帝国大学が作られた。これは日本政府が造った。京城帝国大学も台北帝国大学も日本政府が造った。誰のために造ったのかというと、朝鮮人のために台湾人のために造ったのです。それから3年遅れて1931年に大阪帝国大学が作られた。名古屋帝国大学は1930年です。だから大阪、名古屋帝国大学よりも日本政府は京城、台北帝国大学を造った方が早かった。

20世紀と21世紀は何が違うかということ、20世紀の初めは、人権ということは白人以外の人権は認められていない時代です。黄色人種や黒人は、人権は無視されてもそんなことは当然だと思われたのは20世紀の初めです。21世紀である今は何が違うかということ、白人も黒人も黄色人種もみんな同じ人権をもつということが合意されている時代です。これは全く違うのです。

実は1900年に義和団の乱というのが北京でありました。今から108年前になります。当時中国の北京に額国の公使館区域というのがあって、そこにアメリカもイギリスもドイツもフランスも日本もイタリアもロシアも大体4,000人ぐらいの外交官やその家族等が住んでいた。ここを中国の白蓮教といういわゆる宗教集団が武装して数万人で取り囲んだのです。人が色々殺されるし、非常に危ない状態になったのです。その時に多国籍軍が編成されたのです。まず当時中心だったイギリスが、一番近い日本軍隊を出してくれといったが日本が出さなかった。また出してくれと言われたけど、いや出せない、と。イギリスから4回要求があつてやっと日本は広島第5師団1万人を北京に派遣したのです。頼まれて頼まれてやっと出ていくというのは自衛隊がアメリカから頼まれてイラクに出ていくのと同じ状況です。そして8カ国で2万人の多国籍軍が編成されて、1900年の6月から8月中旬までかかってやっと北京の公使館区域が開放されたのです。2万人の多国籍軍、半分の1万人は日本の軍隊（第5師団）でこの時、福島県会津出身の柴五郎（しばごろう）中佐という人が指揮官で活躍をした。それが終わると日本は何もとらないで日本に戻ったのです。

ロシアは大した活躍もなくともいっばいっていった。戦死者が50人で、49人は日本の兵隊です。日本というのは非常に黄色人種の国だけど、すばらしい国だということで1902年に日英同盟が初めて結ばれるのです。白人国家が黄色人種の国家と同盟を結ぶというのはその時初めてです。中国はこの時、有名な清の西太后が義和団を支持するわけです。だから、この白蓮教の集団も頑張るわけです。これはすごくおかしいことです。いわゆる外国が北京に行っていれば、その外国の高官とか公使館とかを守るのは、中国政府の責任ですよね。でも、中国は守らず攻撃をかける。これは今、現在に訳すと横田基地に航空自衛隊とか陸上自衛隊が攻撃に行くようなものです。米軍の横須賀とかね。これっておかしいでしょ。しかし、これを中国は20世紀のはじめ

にどんどんやっていたわけです。そうすると日本は、例えば自衛隊が横田基地を攻撃すればアメリカは横田基地を守るために増員しなければなりません。守るために増強してきます。だから、日本も当時はそういうことをされるから、どんどんどんどん引きずり込まれて行くのです。けっして日本が侵略のために中国を出て行ったのではないのです。だけど、それが今、侵略だといわゆる宣伝に負けているのです。なぜかという、戦後の左翼教育にならされてそうになってしまっているわけです。だから嘘、捏造がいっぱいできているのです。

私が沖縄にいるときにはじめて聞いたのですが、11年前の平成9年に、沖縄には軍用地主という人が頭数約3万人いるのです。その中で、米軍に土地を貸さないという人が頭数にして約1割の3千人いるのです。この反戦地主というのは、3千人のうち1,500人は沖縄に住んだことのない人たちです。東京とか大阪とか札幌とか福岡とか、大きな大都市に住んでいる学者とか、いわゆる共産党員ですね。この3千人が土地を全部あわせたら3,000人の合計が20m×100mです。この3,000の人たちが国との契約に応じないから、国はこの土地代相当分を半年に一度、裁判所にお金を預けるのです。それで、彼らはその裁判所からそれを引き出すということ。国と直接はやらない。この3,000人の中に一番小さい土地を持っている人がちょうど11年前、76名いました。1坪を共有ですから地主ではありません。その76人が持っている土地というのはどのくらいの土地かという一人平均テレホンカード半分ですから。一般にお百姓さんが土地を取り上げられて生活に困ると「何でそんな意地悪を国はするんだ！」というみたいな感じで報道されていますが、実際はまったく違うのです。これらの人たちは、土地代は半年で4円です。4円振り込むのに手数料が880円かかるのです。これはただ、国がやることを邪魔しているだけです。これはなかなか報道されません。南京大虐殺も靖国参拝もみんな一緒に、嘘ばかり報道されます。そういう日本が戦後、いわゆる教育会、それから言論会、それから言論会にはですね、この日本の自己破壊システムというか癌細胞みたいなものが埋め込まれてしまっているのです。これを取り除かないと、なかなか日本が立ち直れない。自分の国を自分で守るという体勢にならない。でも、そういうなかにあってもこの自衛隊は本当にすばらしい組織だなと私はつねづね思います。日本にはですね、古来武士道というものがあります。この武士道という言葉についてかかれたものは色々ありますが、一番根本に何があるかという、やはり自己犠牲の精神です。自分は犠牲になっても国家や国民のために頑張ろうと、誰かのために頑張ろうということです。一番、思想のベースではないかと私は思います。これが戦後教育の中でも、昔は日本の一般の人が皆そう思っていた。これは本当に人間の美しい心だと思います。人間は美しい心もあるし、悪い心もあるのです。

でも、皆この美しい心を持っていたのが、だんだんと失われていくのです。これは

戦後の教え方ですね。お前の爺さんは非常に悪いやつだったと、犯罪人だったんだと、お前の親父もろくなやつではなかったと、もう盗んだり殺したりとんでもないやつだったという風に戦後は教えられてきたきらいがあるのです。教えてきた人が左翼にのっとられた教育の中で。

でも、比較で言うと日本というのは今でもよその国よりずっと穏健な国です。今の日本人も昔の日本人も基本的にはほとんど変わりません。その穏やかさという意味においては。そういうことで、なかなか自分で自分の国を守るといのは育たないからアメリカに守ってもらわなければいけないと、今度はアメリカの言うことをなんでも聞かなければならないということになるわけです。国というのは利益で動くからです。個人と個人といのは必ずしも利益だけでは動かないものです。美しい心で動くのです。あの人はいいい人だからあの人のためならなんでもやってあげようと。でも、あの国はいい国だからあの国のためだったら何でもやってやろうというようなことには、国と国との関係では絶対になりません。日本がバブル崩壊でいろいろ自衛隊に関係するところでも三沢の古牧グランドホテルが乗っ取られましたね、ゴールドマンサックスに。新田原のシーガイアというリゾートも乗っ取られたそうですね。こういうことがやはり自分で自分の国を守らないと経済的にもいろいろ言うことを聞かなければならないから、いろんなことがおきますね。国がやっぱり損をする。だから、自分の国は自分で守れる方向に一步ずつ行かなければなりません、なかなか日本の軍が強くなるとロクなことをしない、悪いことばかりするというようなことを言われるからどうしてもそういう方向になかなか一步ずついけない。

核兵器も日本ではなかなか議論をすることさえも問題となることが多い。これは核兵器を私が持てと言ったとか言う問題となるから、そのようなことは言いませんがそのようなことを言っている人の意見を言います。

伊藤貫（いとうかん）さんという人がいます。アメリカのコーネル大学の教授をやっていた日本人です。1953年生まれの日本人ですね。

彼が言っているには「核兵器を持たない方がより平和が維持出来ると考えている政治家あるいはそう言っている国は、先進国の中では日本だけです。持った方がより安全なことは絶対に間違いないんです」と、伊藤先生は言っています。私が言っているわけではありません。

核兵器は兵力の均衡を必要としない兵器なのです。我々が若い頃は、「ソ連は非常に国がでっかい。日本は非常に狭い国だから核兵器で撃ち合いをやっても全然勝負にならないから核兵器を持ってもしょうがない。」と、よく話を聞かされ教えられました。けれども、核兵器というのは通常兵器と違って、兵器の均衡を必要としない。通常兵力が10対1だったら、戦争をやるなら10の方が必ず勝つ。でも、核兵器は、10対1

だったら10の方が勝てるかというと、そうではなく、核戦争には勝利者はいない。何故なら、1の核兵器でも10の核兵器を持つ国に対して、耐えられないほどの被害を与えることが出来るからです。だから、核兵器は通常の兵器と違って、持つことに意味があります。

イラクがアメリカの攻撃を受けたのは、核兵器を持っていないからだと言っています。北朝鮮が今、なぜ大して持てるわけでもないのに、核兵器をいっぱい持とうとするかというと、核兵器を持つ国を軍事力で潰すことが出来ないからです。反撃を受けた時が恐ろしいから。例えばアメリカが北朝鮮に攻撃をして、一発でもアメリカに打ち返されたら、耐えられないほどの被害がでる。だから、核兵器を持った国を軍事攻撃で潰すことが出来ない。それがわかっている、北朝鮮は核兵器を持とうとしている。絶対に諦めることはないだろう。どんなことをしたって、嘘を言ったり、欺したとしても、絶対に核兵器を持つまで北朝鮮は頑張るはずだと、伊藤先生が言っています。私が言ったのではありません。

イギリスのサッチャー首相は、1980年代にソ連がINFの長距離核兵器を持ってドイツ等ヨーロッパ辺りに配備するといった時に、イギリスの国会で「日本が広島や長崎に原子爆弾を落とされたのは何故か。核兵器を持っていなかったからだ。」と言っています。

今、ドイツ、イタリア、トルコ、ベルギーなどこれらの国は、アメリカと核兵器に関する条約を結んでいます。ニュー・クリア・シアリング・システムと学会では呼ばれているそうです。これは、ドイツやイタリアの軍が日常的にアメリカの核兵器の操作訓練をやって、そして、核の恫喝を受けた時点で、直ちにソ連の核兵器はそれぞれドイツやイタリア、トルコに引き渡されるというものです。核兵器を持っていることと同じになります。ドイツは核兵器を持っていないではないか、イタリアも持ってないではないか、というけれど日本とはちょっと状況が違う。だから、日本も例えばアメリカの原子力潜水艦の核兵器を海上自衛隊が日常的に操作をして、いざとなったらそれを渡せと言っておけば、日本が核兵器を持たなくても核抑止力がより強化される。非核三原則を守ったままで大丈夫なのではないかと、伊藤先生は言っています。

こういう中であって、日本は保守派の人が非常に発言を控えている。一部の人は言っていますが。マスコミも、反日の意見はどんどん取り上げますが、親日的な意見はなかなか取り上げてくれない。我々自衛隊は親日の代表みたいなものだ。保守派の代表みたいなものだ。だから、我々が外に向かって意見を言っていかなければならない。しかし、意見を言うと必ず問題が起こります。問題が起きた時には、航空幕僚長を筆頭に航空自衛隊が頑張るしかない。問題を起こしてはいけないと私が言うと、なかなか戦えない。皆さんが外に出ていけない。問題はなんぼ起こしてもいいから頑張って

下さい。そして、若い皆さんはどうしたら良いかと言うと、新聞は産経新聞を読まれたら良いのではないかと思います。言っときますが私は産経新聞から一銭も貰っていませんよ。産経新聞の一面にある産経抄というのが右下にあります。産経新聞の主張というか正論ですね。最近名前が変わりましたが。あれを毎日読むだけでもかなり違うと思います。あとは、「月間正論」とか、「Voice」とか、「諸君！」とか、あのあたりの月刊誌を一冊毎月読むことです。そこから色々考えが広がっていくと思います。

アメリカの悪口をいっぱい言ったようになりましたが、私はアメリカが大好きですし、アメリカと真っ向勝負する必要もないですし。そんなことをすれば、日本が潰れると思いますね、今は。アメリカと仲良くしていかなければならない。一番強い者と喧嘩するのはアホだ。上手くやっていかなければならない。でも、アメリカはアメリカの国益でしか動かない。先の伊藤先生は、「中国の核が世界を制す」という本を書いています。この伊藤先生は、「例えば尖閣諸島を巡って日中でいざこざが起きた。そのとき、『中国にアメリカが手をだしたら、ワシントンに対して核ミサイルを撃ち込むぞ』と言われた時にアメリカが手出しを出来るか。出来ないはずだ。だから、抑止力というのは必ず効くとは限らない」と、言っています。

武器を輸出するのが悪いことだというものもあります。武器輸出三原則。本当は武器輸出が出来れば日本の防衛産業はすごく楽になるし、自衛隊も楽になる。安い物がいっぱい買えるから。でも、なかなか日本の国是だからできない。自衛隊のファントムも古くなっているので、ああいう物が売れば新しい飛行機が早く買えるけど、今はなかなかそうもいかない状況ですね。

皆さんにあとこの地域で頑張ってもらいたいのは、地域の小学生や中学生、あるいは高校生も、「日本の国というのは本当に素晴らしい国だ」という教育を受けているかわからない。そういうことをしてくれる先生は少数派です。だから皆さんが、剣道を教えている人がいるかもしれない、あるいはサッカーを教えている人がいるかもしれない、野球を教えている人がいるかもしれない、そういう人たちが子供達を集めた時に、3分でも5分でも日本という国は本当に素晴らしい国だと話してあげることが大事だと思う。

日本人というのは「礼」に厳しい。礼に始まり、礼に終わる。武道はもちろん、野球をやる人も野球場に行ってグラウンドにお辞儀をする、礼をしますね。帰るときもグラウンドに礼をしますね。サッカーもそうです。だから、イチローや松井が、アメリカの野球場でグラウンドにお辞儀をするから、アメリカの選手から見たら何だ、あれはと。中田がヨーロッパに行ってサッカーグラウンドにお辞儀をするから、あれは何をやっているのだ、ということになります。でも、日本人はそれによってこの美し

い心を外に出るような生活をしようと心がけているわけですね。何かを敬って。だから、こういったすぐれた点が日本にはいっぱいあるわけです。日本の歌もそうです。「うさぎ追いし彼の山」といっても、あれを外国人が聞いたら、何が良いのだろうと思うのでしょね。日本人だと涙が出そうになりますが。そういう感性というものは、日本人でなければなかなかわからない。でも、日本人というのはそういう他の国の人には無い、そういう豊かな感性というものがあります。絵も書も、あるいは茶道だったり、もちろん武道も、そういうこの日本の良い点を我々が受け継いで、また、後輩に、子孫に伝えていかなければいけない。その中核的な役割を、私たち自衛隊が果たしていくのではないかというように思います。

自衛隊は、今まで外に出ることが無かったのですが、この数年で外に出て外国軍と一緒に活動するようになりました。立派に任務を果たして尊敬もされています。自衛隊は何でもきちんとやるということで。是非皆さんも自信を持って各級指揮官を中心に、任務や教育、訓練に邁進していただきたいなと思います。

ご静聴ありがとうございました。